

所長挨拶

あわい
温もりと効率の間で

たむら ひろおみ
田村 悦臣
(薬学メディアセンター所長)



平成25年10月より薬学メディアセンター所長を務めております。前任者の杉本芳一・初代薬学メディアセンター所長はじめスタッフのご努力下、旧共立薬科大学図書館は、大変機能的なメディアセンターへと変貌をとげています。レイアウトを変更し、グループ学習室を拡充させ、AV機器も更新したことによって、学生にとっても居心地の良いスペースとなっています。芝共立キャンパスでは3棟すべてが3階で繋がっており、研究棟の3階に位置するメディアセンターはアクセスの良い場所に当たります。そのためもあり、人口密度の高い芝共立キャンパスにあって、オアシスのように学生を引き付けています。

一方、薬学教育への6年制の導入による学生数の増加、研究力アップのため設備充実化、といった教育・研究環境の変化に伴い、手狭な芝共立キャンパスではスペース確保が大きな課題となっています。当センターも他地区のメディアセンターと同じで、書庫の狭隘化の問題を抱え、これまでも多くの冊子体を廃棄してきました。また、学生・教員のための居室スペース確保の一助にすべく、薬学メディアセンターの書庫の一部を開放することになり、そのため、電子媒体で利用可能な冊子体を中心に、除籍や山中資料センターへの移動の準備を急いでいるところです。ただ、冊子体を残して欲しいという教員からの意見も根強くあり、まことに悩ましい限りです。

私ごとになりますが、乱読家のためにただでさえ狭い自宅に本が溢れ、家族からは冷たい目でみられています。若い頃求めた文庫本でも捨てるには勇気と決断が必要なものです。「蔵書」というと大仰ですが、何十年ぶりかで読み返すと、その頃とは違った気づきや感動を覚えることもよくあります。

そう言えば学生時代に図書館で、F. JacobとJ. Monodによる「オペロン説」（彼らはこの業績でノーベル賞を受賞しました）が掲載された1961年のJournal of Molecular Biologyの合冊子体の中の、40

ページ近いその論文の所だけが手垢で真っ黒く帯になっているのを見た時の感動は、今も忘れられません。昨今の電子ジャーナルの隆盛は、そうした感動を覚える機会を奪っているのかもしれませんが。

しかし、とりわけて自然科学の場合には、電子ジャーナル化の流れを変えることはもはや不可能でしょう。指数関数的に増大する情報量は紙媒体の収容能力を超えています。特に、いわゆる「ビッグデータ」を扱うような研究分野においては、紙媒体は要約の掲載がせいぜいで、核心部分はサプリメントとして電子媒体で供給されるケースが増えています。そもそも初めから冊子体を持たない学術誌が次々と創刊されています。

この電子化の波は、文系領域の学術研究や教育にも及んでいます。永遠のベストセラーである聖書さえも例外ではなく、聖書専用のタブレット端末アプリYouVersionのダウンロード回数は1億5千万回を超えています。PDFファイルであれば、たった2.5MBの中に収まります。近い将来、ホテルの机の中には聖書のPDFファイルが入ったSDカードが置かれるのでしょうか？ それも寂しい気がします。紙の本が持つ温もりが決定的に欠けているからでしょうか？ とは言え、現代の文章の多くは、私もそうですがPCを使って書かれており、いずれは、ディスプレイを通じて読むほうが逆に筆者の息吹を感じず、なんてことにならないとも限りません。幸いなことに、この文章は、「MediaNet」という冊子体としてまず世に出ることになっています。

粘土板、石板からパピルス、羊皮紙へ、また筆記から活字へと文明は大きな転換を経てきましたが、今またそれに劣らぬ革命が起きています。情報の収集とその公開という図書館機能の本質は変わらないでしょうが、限られた予算とスペースの中でいかに効率を持たせるか。メディアセンターに課せられた使命は重く悩ましいと、我が身を引き締めています。